

ミュージアム展示をめぐる人々

——広島県呉市・大和ミュージアムを事例に

福西加代子

1 はじめに

本論文では、広島県呉市の海事歴史科学館（以下、大和ミュージアムと呼ぶ）を事例として、博物館というコンタクト・ゾーンにおいて展示物を中心に人々がどのように関わるのかを考察する。

ジェームズ・クリフォードは『ルーツ』の中で、ミュージアムをコンタクト・ゾーンとみなし、「“コレクション”という組織構造は、現在も進展している歴史的・政治的・道徳的関係性となる。つまり権力が配備された交換の、そして攻防の装置となるのだ」[クリフォード 2002:220]と述べている。つまり、ミュージアムにはモノが集まる中心とモノが発見される周縁のコンタクト・ゾーンが想定されているのである。クリフォードはミュージアムを普遍的文化のコレクションとして描写することの不適当さを提唱している。むしろ、「接触という視点はすべての文化収集の戦略を、支配やヒエラルキー、抵抗や動員といった個々の歴史に対する応答」[クリフォード 2002:244]とみなすことを提唱する。だが、はたしてこうした支配やヒエラルキー、抵抗といった概念がすべてのミュージアムに有効だろうか。

こうした問題意識を受けて、本稿では、クリフォードの言うコンタクト・ゾーンとしてミュージアムをとらえようとする視点を批判的に継承し、大和ミュージアムではどのような接触が生じているのかを描くことを目的とする。大和ミュージアムはその名の通り、「戦艦大和」を中心に海事及び海軍に関する歴史と科学技術を扱った博物館である。「戦艦大和」の10分の1の巨大模型が展示されていることで、2005年4月23日の開館後は連日メディアで取りあげられ、話題となった。全長26メートルの巨大模型の話題性だけではなく、このミュージアムには多くの海軍や戦艦に関する貴重な歴史資料がある。それらの資料の中には、呉に「戦艦大和」や海軍・海事に関する博物館が設立されるという噂が広まったことで日本全国から寄贈されたものもたくさんある。

以下では、大和ミュージアムでの調査から、大和ミュージアムの資料に関わる様々な人の視点を中心に見ていく。第2章では展示室内を中心に大和ミュージアムの概要を述べる。続く第3章では資料寄贈に関する大和ミュージアムの学芸員と地域住民の関わりを見ていく。そして第4章ではミュージアムの展示室内でおこなわれるミュージアム・ボランティア

ア・ガイドに焦点を当てる。第5章では、呉市民、そして来館者の視点から、大和ミュージアムを描く。そこから、コンタクト・ゾーンとしての大和ミュージアムを考えていく。

2 大和ミュージアム

はじめに、調査対象である大和ミュージアム(写真1)の概要、及び設立過程と展示室内を見ていく¹⁾。

2-1 概要

大和ミュージアムは広島県呉市の近代の海軍鎮守府以降の歴史や造船技術をメイン展示とした海事歴史科学館である。展示物の中で「戦艦大和」の10分の1模型が目玉のため、「大和ミュージアム」という愛称で呼ばれる。設立主体と運用主体は呉市である。館内は、1階には数々の企画展や式典をおこなう「大和ホール」と「大和ひろば」があり、「大和ひろば」には10分の1「戦艦大和」の模型が展示されている(写真2)。展示室内は「呉の歴史」と題して呉市と海軍の関わりを年代順に追っている。次に「大型資料展示室」があり、「零式艦上戦闘機」六二型や特殊兵器「回天」十型試作型、特殊潜航艇「海龍」後期量産型などの実物の大型資料が並んでいる。スロープを上って3階へ行くと造船や船に関する様々な科学を学ぶための「船をつくる技術」と題された展示室や、名誉館長である松本零士氏のコーナーである「未来へ」の展示室がある。その他に実験工作室があり、そこでは毎週土曜日に手軽にできるワークショップを開催し、毎週日曜日にはサイエンス・ショーもおこなっている。また、月一度、参加者を募集して工作教室を開いている。4階は、一般利用のできる「市民ギャラリー」と「会議室」やライブラリーがある。4階テラスに出ると呉湾の景色を一望でき、「大和のふるさと」と言われる「戦艦大和」の建造ドックも見ることができる。

職員は、館長をはじめ、2階の事務室に職員が10名、海上自衛隊OBの嘱託職員が4名の合計14名。そして、4階の研究室に職員が4名、学芸員が5名、嘱託職員が4名、臨時職員が1名の合計14名で運営している。主に2階事務室が博物館の広報や経理を担当し、2階の嘱託職員は大和ミュージアムに隣接する駐車場ビルの管理室に常駐している。4階研究室は資料研究活動や館内案内業務をおこなっている。4階研究室の嘱託職員が3階の実験工作室での活動を取り仕切っている。その他に、クルーと呼ばれる受付や館内案内を担当する人がいる。それは業者に委託という形でおこなわれており、担当者は市の職員で



写真1 大和ミュージアム正面入り口

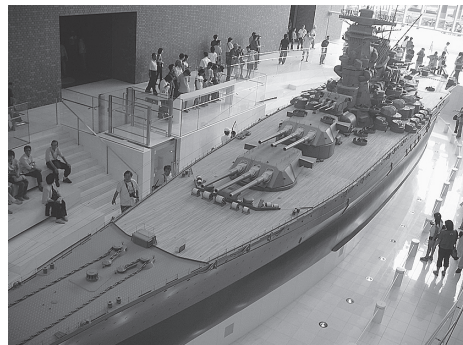


写真2 10分の1「戦艦大和」の模型

はない。彼らの仕事は来客の取り次ぎや団体客へのチケット販売、館内での安全な見学のための監視である。クルーは基本的には展示ガイドはせず、展示ガイドはボランティアがする。ボランティア・スタッフは合計86名が活動している。

開館後、2005年11月5日に来館者100万人を達成し、1年目の2006年4月23日には170万人を突破し、7月1日には200万人も突破した。

2-2 設立の経緯

1990年代半ばから呉市では「戦艦大和」に関する「「大和」におもう」シンポジウムが開催されてきた（表1）。そしてまた、坊ノ岬沖に沈没している大和の海底調査などでその名が全国的に知られていった。その一方で、1990年、1991年あたりから大和ミュージアムの構想が本格的にスタートした。当初は、呉市の図書館の3階の奥にある小さな集会室での造船関係資料の調査・収集から始まった。そして1994年に博物館資料収集委員会が設置され、その後1995年に呉市史編さん室の中に海事博物館の準備担当が置かれ、海事博物館設立構想が策定され始めた。翌年には呉市の築地町に海事博物館推進室となって移転し、船の資料展示室収蔵展示施設を開設する。呉市の主要事業として計画が進む中、資料収集は続けられ、2000年には基本設計、2001年に実施設計、2002年には建設工事が始まった。

表1 「「大和」におもう」シンポジウム一覧

シンポジウム	日時・場所	基調講演	パネルディスカッション	コーディネーター	参加者
第1回「大和」におもう—レンガのある風景・呉から—	1995年10月21日 (土) 午後1時 呉市文化ホール	早坂暁	辺見じゅん・西畑作太郎・田中優子・早坂暁 (発言順)	千田武志	約800名
第2回「大和」におもう—世界が見た「大和」、日本がおもう「大和」—	1997年2月14日 (金) 午後6時 呉市文化ホール	猪瀬直樹	浅羽満夫・見延典子・景山崇人・猪瀬直樹 (発言順)	横岡達真	約1000名
第3回「大和」におもう—大和からヤマトへ—	1998年4月7日 (火) 午後6時 呉市文化ホール	松本零士 (付「さらば宇宙戦艦ヤマト」上映)			約1100名
第4回「大和」におもう—現代にいきづく「大和」の技術—	1999年10月7日 (木) 午後6時 呉市民会館	前間孝則	小林敏郎・田中和成・前間孝則 (発言順)	糸井宏	約700名
第5回「大和」におもう—海底の「大和」に再会して—	2000年10月13日 呉市民会館	渡辺宣嗣	西畑作太郎・橋本正美・戸高一成 (発言順)	渡辺宣嗣	約700名
第6回「大和」におもう—少年兵の見た「大和」—	2002年2月7日 ビューポートくれ3階きんろうプラザ大ホール	八杉康夫			約350名
第7回「大和」におもう—「大和」の建造の意味するもの、沈没の意味するもの—	2002年10月11日 呉市文化ホール	立花隆	松本零士・前間孝則・立花隆 (発言順)	渡辺宣嗣	約1300名

大型展示資料の収集は多方面にわたった。例えば、大和ミュージアムの中で10分の1「戦艦大和」と並んで目玉展示とされている「零式艦上戦闘機」（六二型中島八二七二九号）は、1973年に京都在住のダイバーが滋賀県米原町沖約5キロメートル、水深27メートルの琵琶湖の湖底で発見したものであった。その後、調査がおこなわれ、1978年1月京都嵐山美術館により引揚作業が開始された。1993年に京都嵐山美術館が突如閉鎖となり、白浜御苑・零パークに移転する。そして2002年3月に白浜御苑・零パークが閉鎖し、2005年呉市によって8,500万円で買収された。

特殊兵器「回天」十型試作型は、アメリカが終戦後6隻試作艇を建造させて、1隻は技術調査団が本国へ持ち帰ったものである。アメリカでの調査終了後にスクラップ業者から京都の湯豆腐屋「嵯峨野」へ移された。その後は湯豆腐屋の庭に展示されていたものを呉市が交渉して、嵯峨野からの寄贈資料となった。当時の図面があり、それをもとに修復がおこなわれた。

このように準備段階で、大型資料の1点1点から大和乗組員の遺書、大和の図面に至るまで、幅広い収集作業がおこなわれた。

2-3 展示室内

ここでは大和ミュージアムの展示室内の様子を詳細に見ていく（写真3）。まず、建物の中に入るとエントランス・ホールから10分の1の「戦艦大和」の模型が見える。ちょうど菊の御紋が正面で来館者を迎えるようになっている。「戦艦大和」の模型の後方は海に面して一面のガラス張りで、日差しのおかげでとても明るい。よく、なぜ海に向けて置かれていないのか、と質問されるそうだが、これは入り口からの来館者を正面で迎えるためと答えている。受付を抜けて奥に入り、左手に「戦艦大和」の模型を見ながら右手から「呉の歴史」の展示室が始まる。展示室の壁面はすべて上から順に、世界史、日本史、呉市史の順に並び、世界情勢と日本の近代化の歴史が呉の歴史と重なり合うことを強調している。また、壁面の年表の下には当時の重要人物の写真と解説が並ぶ。これは、より顔の見える展示を目指しているためである。



写真3 展示室内

はじめに、近代への夜明け「呉鎮守府の開庁」のコーナーが始まる。ここではペリー来航以降、日本が海軍を創設し、その拠点として鎮守府を設置していく様子が映像で解説される。呉の鎮守府設置調査の建議書や上申書が並び、呉鎮守府の標札や当時の呉鎮守府庁舎のレンガも並ぶ。次に映像を挟んで、技術習得の時代「呉海軍工廠の設立」である。ここでは呉が市政を実施した時代も展示している。このコーナーの反対側には戦艦「金剛」に搭載された「ヤーロー式ボイラー」³⁾の実物がマネキン人形とともに展示されている。これは高さ5メートル、重さ約30トンもあり、とても大きく、臨場感あふれる展示なので多くの人が写真を撮影している。⁴⁾

次に展示室の角の部分に「第六潜水艇⁵⁾」のコーナーがあり、続いて「大戦景気と呉海軍工廠」、軍縮期の「生産と管理の合理化」が続く。そこでは海軍拡張に伴う職工黄金時代と言われた時代から、軍縮をきっかけとした質の高い造船技術の開発への道が展示される。また、職工の生活を感じさせるアルミ製の弁当箱や職工手帳、健康表彰盾などが展示される。そして、技術開発ではゲージや鋳打機、ノギスなどの道具が並べられる。当時の呉の様子や文化、スポーツなどについても展示されている。

ここから順路が二手に分かれる。右手に「戦艦大和」に関する部屋がある。右に曲がらずにまっすぐ行くと、右側に呉市の広という町にあった広支廠が広工廠・第11工廠へと独立した「広海軍工廠と第11海軍航空廠」があり、広海軍工廠で生産された航空機の模型がずらりと並んでいる。左側には「呉と太平洋戦争」の映像があり、この映像は展示室の中で人々が最もよく立ち止まって見ている。内容は日本が太平洋戦争に突入するに至った過程であり、「戦艦大和」建造の背景を理解するのに最も重要な部分とされている。しかし、ここで多くの人が立ち止まり、そしてまたちょうど道が二手に分かれる場所であることから展示室内の順路が断ち切られてしまう。そのためその隣にある「呉と太平洋戦争」の展示コーナーは比較的空いている。しかし、山本五十六⁶⁾の書などの展示があり、足を止めてじっくり見ている人が多い。その隣には、呉で建造された艦艇模型と潜水艦模型（縮尺100分の1）が並ぶ。

順路をまっすぐに行くと、展示室の角の部分に「回天」コーナーがある。ここでは「回天」の開発と作戦についての展示がされている。また、自ら「回天」搭乗員に志願した塚本太郎がレコード盤に肉声で録音した家族宛のメッセージを「大型資料展示室」の「回天」の前で実際に聞くことができる。「回天」コーナーの隣からは「戦時下の市民生活」、「呉空襲」、「呉と原爆」の展示が続く。女子挺身隊の宣誓血判書や、防空頭巾、空襲のパネル写真などがある。原爆に関しては、広島原爆投下直後にいち早く呉鎮守府から調査団が派遣されて、国内で初めて原子爆弾であることをつきとめた、という点が強調して語られる。それらの展示の反対には「呉海軍工廠で建造された全艦艇133隻とその他特殊兵器」の写真が壁一面にある。その奥にベンチとともに、証言者映像「呉の歴史」が流れている。休憩がてら座って見ている方が多い。これまでの一続きの部屋を抜けると、次は戦後の呉の「平和産業港湾都市としての再生」と「呉の現在」である。ここでは戦後復興に貢献した人々や、企業の展示がおこなわれている。また、企業スペースは各企業に貸し出しという形で設けられている。

途中、順路からそれて入る「戦艦大和」の部屋は、右手側に「技術の結晶「戦艦大和」」、「大和」の建造計画」、「大和」の建造」、「大和」の技術」が続く。ここでは大和の概要を映像で見て、建造の様子を写真で見ることができる。「戦艦大和」にどのような技術が搭載されていたかを細かく見ることができる。「戦艦大和」の部屋の真ん中には地形模型がある。これは、「戦艦大和」進水直後の昭和15年（1940年）8月末頃を再現した呉・広地区の地形模型（縮尺1/3000）である。左手側は、昭和16年（1941年）12月16日竣工後の「大和」の生涯、そして山本五十六はじめ歴代艦長など「大和」に乗っていた人々の写真が展示されている。ここは、狭いスペースに大和の証言者映像もあり、乗組員の写真

や遺書が並ぶコーナーや、「戦艦大和」戦死者沖縄特攻作戦名簿の一覧があるためいつも混雑している。そして、「大和」の現在」では1985年「海の墓標委員会」、1999年「大和プロジェクト'99」（全国朝日放送㈱）の2回にわたる潜水調査の引揚品が展示され、潜水調査の映像が流れている。

多くの人がこの部屋を見学した後、「呉と太平洋戦争」の順路に戻らずに大和ひろばに出てしまうことから先に述べた順路の分断の問題がおこっている。展示室「呉の歴史」を見終わると、再び大和ひろばで10分の1「戦艦大和」の模型を眺め、また外の呉湾の景色も眺めながら、続く「大型資料展示室」へと進んでいく。ここでは実物の大型資料がたくさん展示されている。目玉展示といわれているのが「零式艦上戦闘機」六二型（写真4）や「特殊兵器「回天」十型試作型」、そして「特殊潜航艇「海龍」後期量産型」である。これらにはカメラを向ける人がとても多い。その周囲には零戦のエンジンや、潜望鏡、酸素魚雷、砲身などが並べられている。これらの大きな展示物は間近で眺めた後、2階へ続くスロープを上りながら上から眺めることもできる。

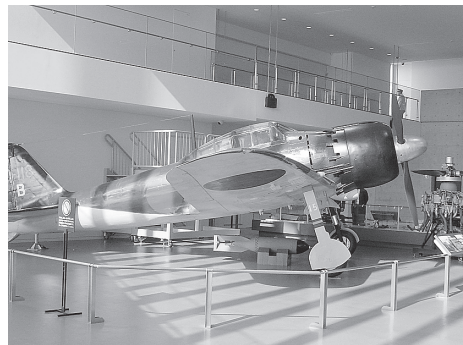


写真4 大型展示、零式艦上戦闘機六二型

2階には艦艇模型展示があり、艦艇模型13隻がショーケースに入っている。そこから、エスカレーターで3階へ上がっていく。3階に上がると吹き抜けの大和ひろばに展示されている10分の1「戦艦大和」の模型を見下ろすことができる。ちょうど3階からの眺めが実物の「戦艦大和」の上空1キロメートルからの眺めとされている。3階には「船をつくる技術」のコーナーがある。ここでは、船の技術を遊びながら学ぶことができるようになっている。実際、いつも子供が遊ぶ姿が見うけられる。

次に、「未来へ」のコーナーがあり、ここでは生活と科学技術、科学技術と夢などがテーマとされている。展示はアルゼンチンに落下した隕石、宇宙服の疑似再現などがあり、ミニシアターも作られている。また、屋外には戦艦「陸奥」のスクリューや主砲身、「テクノスーパーライナー」、潜水調査船しんかい、「水中翼船金星」が展示されている。

3 展示資料を取り巻く人々

2005年4月の大和ミュージアム開館前に収集された資料は大型展示物から写真や図面まで合わせると、合計124,082点に上る。日本軍艦史の権威として有名な福井静夫氏の資料⁷⁾をはじめ、I. H. I（石川島播磨重工業株式会社）資料⁸⁾、「戦艦大和」引揚品、シップ・アンド・オーシャン財団資料⁹⁾などがあつた。そして2005年4月に開館してから、1年半後の2006年9月には収集資料は213,713点になっている¹⁰⁾。開館後1年半の間に、89,631点の資料が新たに収蔵されたこととなる¹¹⁾。

3-1 学芸員と資料寄贈者

資料寄贈者の一人である佐々木さんは、2006年9月10日土曜の昼過ぎに学芸員に一本の電話を入れて、ふらりとミュージアムへやってきた。学芸員と懇意であるらしく、ミュージアムの正面玄関前でいろいろな世間話をした後、ポケットからおもむろにティッシュにくるまれた戦艦「扶桑」の進水式記念杯を取り出し、学芸員に手渡ししながら筆者にこう語った。

この資料は、持ち主の方のひいおじいさんの代のものなんですよ。でもね、持ち主の家族の方たちは自分たちのひいおじいさんが海軍工廠で働いていた偉い人だと知らなかった。

学芸員によると、進水式の杯は工廠の重役しか手に入れることができなかった貴重品であるという。

ひいおじいさんがすごいと知ったのは大和ミュージアムのおかげなんですよ。大和ミュージアムが開館してから「なにか海軍の記念になるようなものはないか？」と親戚中に聞いていましたらね。大掃除の時に神戸の写真館で撮った写真が出てきたよって。家族の人はそれがすごいとは気づいていなかった。それを大和ミュージアムに持ってきたら、学芸員さんたちが、これは珍しいものだ、と言ってくれた。家族の方は、おじいさんやひいおじいさんがこんなに偉い人だとは思わなかった。うちのおじいさんやひいおじいさんに光を当ててくださった、とね、感謝されたんですよ。

佐々木さんは自分が住んでいる呉市に大和ミュージアムが開館したことを喜んでいた。佐々木さんはこの他にもたくさんの資料の寄贈の仲介をおこなっていた。大和ミュージアムが開館していなければ日の目を見ることもなかった写真や記念杯が、貴重な資料としてミュージアムに寄贈される事例である。

このように忘れられていた記憶が、大和ミュージアムの開館を契機に眠っていたモノとともに引っ張り出されてくる。それは呉という海軍や海軍工廠の置かれた土地柄に加え、常日頃から地域住民との密接なつながりを保ってきていた学芸員の力が非常に大きい。海軍や海軍工廠に関する情報や資料が、地域の人々からの口伝えで広がり様々な人の手を経て大和ミュージアムにやってくる。そのため、いつでも電話が入れば走り回れるフットワークの軽さが学芸員には求められている。ある学芸員は地域の人々の資料寄贈に関して以下のように語っている。

寄贈者のおじいさんやおばあさんと顔を合わせて、いろんな話しをしてね、懇意になることが大事なんですよ。地域との連携を保ちながら、情報を手に入れていく。従来の学芸員は研究室にこもって、資料整理ばかりやっていたんだけど、1980年代後半くらいから、地域に開かれた博物館作りを考え、学芸員自らが資料集めに出かけたりもするようになってきている。

このような学芸員の資料収集や研究に対する熱心な姿勢は、逆に地域住民にも伝わっている。大和生還者である石田直義氏の持ち物であった「給与関係綴」は石田直義氏の死後にご子息の手によってミュージアムに寄贈された。

〔大和ミュージアムは〕大和の悲劇性を学ぶ場であってほしい。認識してその人なりに考えてほしい。感じるミュージアムであってほしい。アーカイブズとしての値打ちを高めていってほしい。だから、父のありとあらゆるものを寄贈した。すべて寄贈した。寄贈した、「給与関係綴」は〔大和ミュージアムに〕展示されている。「給与関係綴」は実質的な生存者名簿である。「給与関係綴」は父が生還して帰ってきてから、安浦で書類を作った。生き残ったものへの給与の支払い名簿だから、生存者名簿になる。大和の戦死者名簿はない。「給与関係綴」はとても貴重なもので、日本に一つしかない。父はとても大事にしていた。毎日新聞の方が昔、見て驚いて防衛庁に送った。鑑定したところ、一級の資料だと言われた。〔そのことが〕新聞の全国紙にも掲載された。大和の貴重な資料が見つかった。父はとても喜んで、家の家宝だから自分が死んでもずっととっておくように言っていた。しかし、私は腹のうちでは、それは間違っていると思っていた。貴重な資料は、大和ミュージアムのようなアーカイブズができるのであれば、寄贈しようと思っていた。しかし、そういうもの〔アーカイブズ〕がないので、商業主義で映画を作って、というのであれば寄贈はしない。学芸員さんたちは資料を地道に収集している。そういう人たちに保存してもらえるとすることはいちばんいいだろうと、寄贈した。……大和ミュージアムの方々が真面目に海軍資料を収集し、保存しようとしている真摯な姿勢が見えたので遺言に背きながらも寄贈する決心がついた。

石田氏のご子息は大和ミュージアムの学芸員たちの研究姿勢に賛同して資料を寄贈する決心がついたのである。

3-2 呉市と資料寄贈

地元の方々から寄せられる寄贈の一方、異例の寄贈に、2006年9月23日に開催された俳優石坂浩二氏による寄贈式がある。これは、2005年9月27日放送の『開運！なんでも鑑定団 2時間スペシャル』に、出てきた「戦艦「長門」の旗3点」を見て、石坂氏が番組の最後に軍艦旗を購入して大和ミュージアムに寄贈すると宣言したことから始まった。1年経った2006年9月23日に晴れて大和ミュージアムで寄贈式、石坂氏による寄贈特別記念講演会がおこなわれることになった。寄贈特別記念講演会では、長門の軍艦旗購入の経緯や、自身が戦艦の技術や海軍などに興味を持つに至ったきっかけなどについて、大和ミュージアム館長の戸高一成氏と対談した。多くの呉市民がはがきで応募し、観覧に来ていた。

講演会の中で石坂氏は、自らが昨年大和ミュージアムを訪れた後に、番組で軍艦旗が出てきたことで、すぐに大和ミュージアムが思い浮かんだ、と語った。

よかったのか悪かったのかわかりませんが、『鑑定団』に旗が出るという話で。あの旗〔軍艦旗〕と少将旗っていう、今この船には少将が乗っているよという、それと先任旗、先へ行っていいぞという、その3つで出ました。〔番組を〕ご覧になった方もいると思いますが。それで、それを見た瞬間に、これは長門なんだし、長門といえば、呉工廠である、と。これはもともと呉にあるものなんじゃないかな、とこう思ったんですよ。

石坂氏の寄贈後、長門の軍艦旗はミュージアム内に展示されている（写真5）。これは、呉という特殊な土地の持つ力に引きつけられた結果とも考えられる。「戦艦といえば呉」という地になりつつあるのかもしれない。



写真5 2006年9月23日石坂浩二氏の寄贈式

開館以前から、「呉に海軍に関する博物館ができる」という噂が一部の海軍関係者を中心に広がり、寄贈の連絡がたくさんあったという。そして現在も呉といえば海軍工廠、「戦艦大和」といったことから多くの資料寄贈がおこなわれている。全国的に見ても海軍を取り扱った博物館が少ないという事実はあるにしても、海軍関係者にとっては呉イコール海軍というイメージは強く根付いているようである。

また、2006年6月には高松宮宣仁親王の関係資料107件129点が寄贈された。高松宮が呉市と関係が深かったからである。高松宮が呉に住まわれていた時期の話が『高松宮日記』¹²⁾に記述されているという（『大和だより』Vol. 5）。ここでも呉という土地と海軍に入隊していた高松宮との深い関わりが強調されている。

4 大和ミュージアムに関わる人々

ここでは、大和ミュージアムに関わる人々として呉市民を中心としたミュージアム・ボランティア・ガイドを見ていく。

大和ミュージアムの展示室内でおこなわれる、呉市民によるボランティア・ガイドは、平日と土日に分けられ、その中でも、1階の歴史、3階の科学の4つのグループに分けられている。それぞれを平日歴史班、土日歴史班、平日科学班、土日科学班と呼び合い、それぞれにリーダーがいる。現在は86名が登録しているが、活動しているのはそのうちの一部である。最年長は75歳で、最年少は19歳と幅広く、男性61名、女性25名と男性の方が多い。

ボランティア・スタッフは、毎日ミュージアム内に立って来館者を相手に展示についてのガイドをおこなっている。事前に予約のある場合には、4階研究室の職員と話し合った上で、担当者を決めてガイドをする。展示室内にボランティア・スタッフのジャンパーを着て立っていると、写真撮影を頼まれたり、順路を聞かれたりする。それがきっかけとな

って、来館者との会話が弾むことがある。そして、ボランティア・スタッフはそこで聞いた呉の昔の様子や戦争体験の話を、次の案内に活かしている。以下では2種類の歴史班について説明したい。

4-1 平日歴史班

平日歴史班は午前と午後に活動時間が分かれている。それは平日歴史班には、主婦が多いことや、休館日の火曜を除いて4日あるということから、体力的な面も考慮して分けられている。また、平日歴史班には、呉市の観光ボランティアを兼ねて来ている方が多い。

平日歴史班のメンバーがボランティア活動に参加する動機は大きく二つに分けることができる。一つは呉市の観光ボランティアとの兼務の方が多く、観光案内の一環として大和ミュージアムも自分たちで案内することができれば、というものである。彼らは大和ミュージアムを特別な平和学習の場や軍事博物館、といった見方はせずに、わが町呉の観光名所、といった感覚でとらえている。観光ボランティアの活動でもベテランとされているボランティアの岡村さんは「いかにお客様に楽しんでもらえるか」に重点をおいて案内をしている。

観光ボランティアを続けていた松本さんは、大和ミュージアムで2年目からボランティア・スタッフに加わった。

呉のいろんな所を案内してきて一緒に大和ミュージアムも案内できると、呉に来たお客さんは楽しんでくださるでしょう。歴史の見える丘¹³⁾や、入船¹⁴⁾を案内して、ここへ来て私は大和ミュージアムの中は案内できないんです。スタッフではないから、とは、言えないでしょう。

観光ボランティアとしての活動を充実させるために大和ミュージアムでのボランティアに参加しているのである。このようなボランティア・スタッフの案内は、呉の歴史を中心としたものになる。

4-2 土日歴史班

土日歴史班には、平日会社勤めなどで働いている人が多い。土日の2日間は一日中展示室内にいる、ということで仲間意識が大変強い。土日歴史班は、定期的に学芸員や職員やクルー、警備員を誘って、飲み会を開催している。土日歴史班のリーダーは、「こうして、大和ミュージアムを中心として、いろんな年代（クルーの女性は20代前半、ボランティアの最年長は75歳）の人間が集まって、楽しくやれるってのはいいよね」と語っていた。大和ミュージアムを通じてボランティア・スタッフ同士がつながることを重視している。平日は仕事や学校などが忙しくてボランティアに参加できないが土日だけでも、という思いで参加している方が多い。つまりボランティアをおこなうということで自らの生活の充実を求めている。

一方で「戦艦大和」や大和ミュージアムが大好きでボランティアをしているスタッフも

いる。小野さんは平日造船関係の会社で働いているが大和が大好きで土日は朝から大和ミュージアムに来て一日を過ごしている。時間があれば4階のライブラリーにやってきて、口癖のように「わしゃ大和が好きじゃけえ」と言い、嬉しそうな顔で軍艦の写真集を眺めている。学生の高原さんは大和ミュージアムでのボランティア体験から、江田島の術科学¹⁵⁾校への進学を決めた。ボランティア・スタッフはみんな彼の進学をわがことのように喜んでいた。呉で術科学校というと特別な存在であるようだ。

4-3 展示室内ボランティア・ガイド

平日も土日もボランティア・スタッフは、主に年配の方が多く、定年後「家にいてもすることがないから」とか、「毎日、年老いた親の世話や、定年ですっと家にいる主人とずっと一緒に疲れるから」と言っ、ミュージアムに来る人が多い。ボランティアを始めたきっかけも様々で、以前から呉市の観光ボランティア・ガイドもしていてその流れで大和ミュージアムへ来た、という人も多い。また、「呉で生まれ育ったのに、呉の歴史を全然知らないから」と言う人もいる。多くの方が大和ミュージアムのボランティア・ガイドをするようになってから、海軍や海軍工廠、「戦艦大和」や艦船について勉強を始めた。来館者からの質問でわからないことや、自分が疑問を持ったことは、4階にあるライブラリーへやってきて本で調べたり、学芸員に質問したりして、自ら学んでいる。そして、展示室内でボランティア同士の立ち話で情報を交換することも多い。

ボランティア・ガイドは、主に前もって予約のある団体来館者の案内を職員と相談の上、担当を決めている。しかし、突然案内を申し出た来館者に対しても丁寧に対応している。その他にも、展示室内を歩き回り、展示を見ている方の表情を見て、「ご案内させていただけますか？」と声をかける。そうすることにより、自分たちの勉強にもなるのだと言う。また、ご高齢の来館者の方はボランティア・ガイドをしてもらいながら、逆に自分たちの戦争体験を語ることもある。

1年目は科学のボランティアをしていた渡辺さんは、2年目は歴史のボランティアをしている。それは「歴史のボランティアさんたちがね、歴史の方が、いろいろなお客さんとの出会いがあって楽しいよ、と言っ、くださってね」という理由からであった。彼女は実際に大型展示室の「零型戦闘機」の前で、昔零戦に乗っていた、という老人のお話を聞いたという。「それ（お話を聞いたこと）はね、ちょっと感動したわよ。零戦のこともいろいろ教えてもらってね」と、展示室内での来館者との出会いもボランティア活動のよい点として語られる。

ボランティア・ガイドの内容は、人によってそれぞれである。来館者の要望に応じて手際よく、わかりやすく案内しなければならない。ボランティア・ガイドで気にしなければならない点がいくつかある。たとえば、来館者の館内見学にける時間である。団体客ならば集合時間までにミュージアム内をすべて回ってもらえるように配慮する。また、ガイドをする上で最も重要なのが来館者の年齢、性別である。同じ展示室内でも、子供と若者とお年寄り、女性と男性、では大きく変わってくる。それによって案内の内容も変わるのである。女性ボランティアの井川さんは「男性のお客様は大和に詳しい方が多かったり、

軍艦や航空機にも詳しい方が多かったりするからやりにくいわ」と言っている。また「おばちゃんはいいいね、なんでも聞いてくれる。どんな話でも興味持ってくれるからやりやすいわ」と言う。神野さんは、「子供の案内が一番難しいんですよね」と語る。「学校でどこまで歴史を習っているのかわからないし、興味がない子供が多いでしょう。話していてもどこかへ行ってしまったりね」。

ボランティアを始めたきっかけは様々であるが、それぞれの目的を分類すると、まず平日の人に最も多いのが観光ボランティアとして大和ミュージアムのボランティア・ガイドに参加する人である。そして次が自らの生活を充実させるためにボランティア活動をする、というものである。これは平日スタッフの主婦や土日スタッフに多い。この二つの目的は、呉という自分たちが生まれ育った町への貢献や、この町で生活するために、という意味が含まれていると考えられる。一方で大和ミュージアムそのものへの特別な思いを抱いている人々も少数ではあるが存在する。

ボランティア・スタッフは戦後世代の年配の方が多いためか、「平和の尊さ」を重視した語りが多く見られる。そして多くのスタッフが口にするのが、「これほどの技術を日本は持っていたのに、負けてしまったのです」という語りである。「日本という国や呉が素晴らしい技術を持っていた」ということを誇らしげに語り技術を礼賛する一方で、「それなのに負けてしまった」と言う。素晴らしい技術を持ちながら、多くの犠牲を出してしまった。これは一見技術そのものへの批判ともとれる。しかしここでは、ボランティア・スタッフは戦争の悲惨さを認識しつつなおかつ、自分たちのローカル・アイデンティティとしての呉の技術の素晴らしさを語っているのである。

5 大和ミュージアム来館者

博物館にとって最も重要なのが来館者である。館長が言うように、「集客施設は、どんないいものを作っても、人が来なければならないのと一緒に。人が見て初めて存在がある。見なければ、ものすごい立派な施設でも、山奥にあって人が行かなければ、あってもなくても同じ」である。来館者あつての博物館施設である。そこで、大和ミュージアムの来館者がどのように展示を見ているのかを見ていく。

5-1 呉市民

JR 呉駅の裏を埋め立てて、大型ショッピングセンターが建てられたのは大和ミュージアム開館の2、3年前のことである。それまでは呉市内の駅から少し離れた場所にある「レンガ通り」と呼ばれる商店街が町の中心であった。開館以来、連日大和ミュージアムには大勢の来館者が訪れるが、その多くが県外からの観光客である。そのため、呉市民の生活に大きな影響はあまりなく、関心も薄いと言われる。呉の市街から離れた、切り開かれた住宅地の焼山に住む70代の女性は、市街まで行くこともないので、実際に大和ミュージアムに毎日どのくらいの人が来ているのかなどはまったく知らないと言い、あまり関心を示さない。呉駅から山を隔てたとなり町の広に住む60代の夫婦も、たまの休日には大和

ミュージアムの前にある大型ショッピングセンターに買い物にやってくるが、それ以外に呉（駅周辺）に来る用事もないと言う。

呉は平成の大合併により市が広範囲にわたり、小さな島の多い市でもある。そのため、呉市民でも JR 呉駅周辺に住む者にとっては大和ミュージアムの影響は大きいかもしれないが、その他の地域の人々にとってはあまり関心事ではない。せいぜい、親戚や友人が遠くから来た時に連れて行っただけ、という程度である。呉市民でもボランティア・スタッフのように、自ら大和ミュージアムに興味を持ってボランティア活動に参加するのは稀かもしれない。呉市民の多くは突如現れ、全国から人がやってくるような大きな施設に関心が薄い。

現在、呉市商工観光部の一つである大和ミュージアムは、近い将来独立採算性になると噂されている。そして多くの人が現在の一過性のブームのような大和人気に危惧を抱いてもいる。独立採算性となり、ブームが過ぎ去った後の大和ミュージアムがどのように存続していくかは、呉市民の対応にかかっている。日本近代史において独特な歴史を歩んできた呉という町において市民が、自分たちの歴史展示をどのように維持していくのか。これは、彼らのローカル・アイデンティティとも関わってくる問題であると考えられる。

5-2 一般来館者

展示室内でおこなった尾行追跡調査では、多くの来館者が初めに10分の1「戦艦大和」の模型に目を奪われカメラを向ける。そして、その周囲をめぐるうちに展示室の入り口を見失う、といった現象があった。その結果、ボランティア・ガイドやクルーによくされる質問が「展示室はどう回ればいいのか?」となる。展示室内の順路が複雑であるのもミュージアム側の抱える問題ではある。10分の1「戦艦大和」の話題性やスケールに他の展示が圧倒されてしまう。

10分の1「戦艦大和」が展示されている「大和ひろば」ではしきりに、「すごいねえ」とつぶやく老婦人の姿が見られる。しかし出口で、「ここはあの模型しか見る価値はないね」とつぶやいて帰っていく若者もいる。そして、半年前大和ミュージアムを訪れた30代の女性は「大和ミュージアムに行ったけれど、10分の1の模型に圧倒されてしまって、他の展示はあまりよく覚えていないわ」と語る。それほど展示室内を回った来館者の人々には、10分の1「戦艦大和」が最も印象強く残ってしまうのである。

70代の男性は、戦後呉で少し働いていたから呉という町にも思い出がある。だから、大和ミュージアムができて再びここを訪れることができて嬉しい、と言う。彼は技術関係の仕事をしていたので展示を見ても見慣れた工具があるという。それらの技術面での展示を懐かしく見ていた。一方で、70代の女性は技術の展示に対しては、難しくてよくわからない、としながらも「呉空襲」の展示を見て、モンペや防空頭巾などがあり戦時中を思い出す、と語った。今の若い人たちからすれば想像もできないだろうけれど、こんな時代があったのよ、と戦時中のことながら懐かしそうに語る。空襲は呉だけでなく、戦争末期には東京、大阪その他の都市でもおこっていたためか、高齢の方は懐かしいと言って見ている。

しかし、戦争を体験していない世代の反応は異なる。戦争を歴史の教科書でしか学んでいない世代は、一種のアミューズメントパーク的な感覚を持ってやってきている。20代女性は展示を見て、「歴史の教科書で習ったような気がする」と言う。でも「戦艦大和」のこともあまりよくわからないし、とりあえず話題になっているから来てみた」と語る。休暇明けの会社で話の種になるかもしれない、くらいにとらえているのである。映画『男たちのYAMATO』が話題になっていたため、その影響でやってくる人が多かった。

家族連れでやってきた来館者は、30代の父親が、「戦艦大和」が大好きでどうしても見たくてやってきた」、母親と子供は「歴史展示もよくわからなかったし、とりあえず3階で遊べるから父親が満足するまで3階で遊んで待つことにした」と語った。30代、40代の男性は「戦艦大和」や宇宙戦艦ヤマトへの興味で10分の1「戦艦大和」を見たくてやってくる。そして、彼らとともにやってくる子供は歴史も理解できず、「戦艦大和」に興味も持たず、大和ミュージアムへ来て3階の「船をつくる技術」で遊んだことや、ワークショップで作ったもの、サイエンス・ショーで見たことを思い出にとどめて楽しい家族旅行を終えるのである。2005年のゴールデンウィークは尾道での映画『男たちのYAMATO』のロケセットの公開もあり、ロケセットとセットにして巨大な「戦艦大和」の模型が見られると思い、やってきている観光客が大半を占めていた。

6 おわりに

ミュージアムというコンタクト・ゾーンの中で展示物を中心に人々がどのように関わり合うのかを考察しておきたい。本稿では博物館の資料の収集・保存・研究する学芸員の活動と地域住民の関わりから、どのように資料が寄贈されるのか。そして、ミュージアム内でボランティア・ガイドをする人々が大和ミュージアムに対してどのような思いを抱いているのか。最後に展示資料を見る呉市民や一般来館者の視点を見てきた。

まず、学芸員と資料寄贈者の関わりからは、学芸員の活動や姿勢が実を結んだ結果として、地域住民との接触による資料寄贈があった。また、「海軍の聖地」とも言われる呉という土地だからこそ、という資料寄贈があり、呉のローカル・アイデンティティが強調されていることがわかる。そして、展示案内をするミュージアム・ボランティア・ガイドは地元の呉市の誇りとしての造船技術を礼賛する一方で、戦争や多くの犠牲を悲しむことで技術そのものを批判してしまう矛盾を抱えている。しかし、彼らにとっては「呉市の持つ素晴らしい造船技術を礼賛すること」は呉市民のローカル・アイデンティティの強調であり、地域史展示となっているため、大きな矛盾には発展し得ない。

展示を見る側の来館者は、戦争の歴史を学び、平和の尊さを実感する場としてとらえる見方と、10分の1の「戦艦大和」があり、映画にもなっていた、今話題の博物館とみなす見方の二つに分けられる。それは各個人の戦争への知識量や価値観が反映されているようにも思われる。前者の見方は、戦争を身近に感じることでできる世代や、戦後の反戦平和教育を十分に受けた世代に多い。他方、後者の見方は戦争からかけ離れた平和な社会に育った世代に多く、戦争を教科書や映画の中にしか見ることができないため、話題になって

いる博物館にきた、映画を観たから来た、といった感覚でやってきている。そして、実物大を思い描くこともできない「戦艦大和」の10分の1を見て面白いものを見た、という感想で帰っていくのである。それはアミューズメントパークでパレードやショーを見る感覚と変わらないのかもしれない。

このように、ミュージアムの展示資料は展示する側や見る側など、それぞれの視点によって異なる意味を持ち、それぞれの視点にずれが生じている。このようなずれを描き出すことで大和ミュージアムのコンタクト・ゾーンとしての役割を描くことができたと考える。クリフォードが論じたミュージアムは民族博物館であったこともあり、そこに収集する側とされる側との対比がかなり明確に認められ、そうした非対称的な関係をコンタクト・ゾーンとみなしていた。しかし、こうした関係がすべてのミュージアムに当てはまるわけではない。大和ミュージアムの場合、収集されたモノの所有者や展示品が代表する過去はかならずしも周辺に位置するのではない。そこでは、寄贈者と学芸員、来館者とボランティア・スタッフなどの展示をめぐる、より平等主義的な交流を見出すことができる。

注

- 1) 2006年5月から10月にかけておこなった調査段階でのデータである。
- 2) 「戦艦大和」は全長263メートルで、最大幅38.9メートルあるので、10分の1でも全長26.3メートル、最大幅3.89メートルである。小中学生には25メートルのプールよりも少し長い、と説明することもしばしばである。
- 3) 大和ミュージアムで展示されているボイラーは、戦後は科学技術庁の金属材料研究所の建物の暖房用ボイラーとして1993年まで使用されていた。
- 4) 展示室内では一部撮影禁止の展示物もあるが、基本的にはフラッシュ撮影や三脚使用の撮影、ビデオ撮影以外は許可されている。
- 5) 「第六潜水艇」は、1910年4月15日に、岩国市新湊沖で潜行訓練中に沈没し、佐久間勉艇長をはじめとする乗組員14名の全員が殉死した。佐久間艇長の記した遺書には、沈没状況、事故原因、今後の潜水艦技術への提言、乗組員遺族への救済依頼が書き遺されており、引き揚げられた時に乗組員全員が持ち場を離れることなく殉死していたことから、潜水艦乗りの鏡であるとして世界中の海軍に受け入れられている。通常、潜水艦が事故などで沈没した時には出入り口に折り重なるように亡くなっているからである。そして、佐久間艇長はじめ14名の殉職者のために、呉市内の鯛乃宮神社に第六潜水艇殉難之碑がたてられており、毎年4月15日には慰霊祭がおこなわれている。
- 6) 1884年～1943年 元帥、海軍大将。開戦時の連合艦隊司令長官で、真珠湾攻撃を発案・指揮。
- 7) 写真・絵はがき72,973点、図面8,179点、書籍14,847点。
- 8) 図面104点。
- 9) 書籍10,029点。
- 10) 2005年3月31日現在。
- 11) 2006年9月30日現在。
- 12) 第二巻、中央公論社、1995年。
- 13) 現在のI.H.Iで「戦艦大和」の建造ドックを一望することができる高台で呉の観光名所の一つ。
- 14) 旧呉鎮守府司令長官官舎（平成10年国重要文化財指定）を中心に郷土館、歴史民俗資料館である呉の観光名所の一つである。
- 15) 海上自衛隊の教育機関で、第1術科学校は主として艦艇職域術科の教育訓練をおこなっている。呉の向かいに位置する江田島にあり、入学はとても難しいとされている。

参考文献

- クリフォード, ジェイムズ 2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』(毛利嘉孝他訳) 月曜社。
呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム) 監修 2005 『呉市海事歴史科学館——大和ミュージアム
常設展示図録』ザメディアジョン。
呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム) 監修 2006 『今すぐ行きたい! 呉市海事歴史科学館 大和
ミュージアム ガイドブック』ザメディアジョン。

資料

- 『呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム) 17年度年報』2006年10月。
『大和だより』Vol. 1～Vol. 5。
『「大和」におもう シンポジウム全記録集』2003年3月 大和を語る会編。
『呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム) 案内パンフレット』。

インターネット資料

- 大和ミュージアムホームページ <http://www.yamato-museum.com> 2007年1月9日閲覧。